

antique du 1960 vent

mis sur le seau en jardinant
lante vert et l'aime

ous passez un temps heureux?
splendiblement!

logique

de Honshu est enveloppé par une
aujourd'hui. Il y aura beaucoup de
é est donné à concernant l'ensemble
un orage l'après-midi dans les taches
e dans le ciel. Parce que je peux
nt, s'il vous plaît soyez assez prudent
nces du ciel. Dans Okinawa, un ciel
que c'est dans une grande gamme de
avec une plus haute température jour
de l'été plus vieux que.

ault a clarifié que la production de
rnalières a commencé en septembre,
otent de voitures le mois dernier. Mais
alier ne clarifie pas les détails du plan.
ault, il est attendu que la production en
ies en atteignent 900,000 une année
0% disent un voiture.

s sur le seau en jardinant
te vert et l'aime

de Honshu est enveloppé par une
aujourd'hui. Il y aura beaucoup de
é est donné à concernant l'ensemble
un orage l'après-midi dans les taches
e dans le ciel. Parce que je peux
nt, s'il vous plaît soyez assez prudent
nces du ciel. Dans Okinawa, un ciel
que c'est dans une grande gamme de
avec une plus haute température jour
de l'été plus vieux que.

ault a clarifié que la production de
rnalières a commencé en septembre,
otent de voitures le mois dernier. Mais
alier ne clarifie pas les détails du plan.
ault, il est attendu que la production en
ies en atteignent 900,000 une année
0% disent un voiture.

Alors envoyez heureux 1er

J'aime matière française antique.
Je fabrique à la main l'intérieur et l'aime tous les jours.
Qu'est-ce que vous ferez aujourd'hui?

J'ai élevé de l'eau à la fleur du jardin et c'est une ouverture de 1er
lorsque c'est merveilleux. OK, partons bien aujourd'hui.

J'aime matière française antique.
Je fabrique à la main l'intérieur et l'aime tous les jours.
Qu'est-ce que vous ferez aujourd'hui?

Voiture française compagnie majeure que Renault qui a fait la
production journalière compagnie automatique et combinaison
a clarifié que le développement de la voiture compacte a produit
nombre de voitures dans voiture de Russie plus grande compagnie
dans l'offre, usine Tolyatti de par 16e. La perspective que la
production journalière participe à la production.
Je supporte le nouveau développement de voiture de
par le nombre de voitures de voiture compacte stratégique"
", et Renault exécute la production dans la marque de maison.
L'inv. anticipe 240 millions d'euros (approximativement 26,800
millions de yen) par 30

レフエラル・エフエメラ・ブックワーム

Une prévision météorologique
Ephemeral port of Spell Sea

Une prévision météorologique

Il est attendu que le voisinage de Honshu est enveloppé par une
haute pression atmosphérique aujourd'hui. Il y aura beaucoup de
places où l'intervalle ensoleillé est donné à concernant l'ensemble
du pays. Il paraît être pluie et un orage l'après-midi dans les taches
afin qu'une froideur est laissée dans le ciel. Parce que je peux
tomber intensément localement, s'il vous plaît soyez assez prudent
aux changements des apparences du ciel. Dans Okinawa, un ciel
bleu net ouvrira. Il est attendu que c'est dans une grande gamme de
Tohoku à Kyushu, Okinawa avec une plus haute température jour
de 30 degrés de vraie chaleur de l'été plus vieux que.

Le Vice-président de Renault a clarifié que la production de
marques de la production journalières a commencé en septembre,
12 dans le commonized comptent de voitures le mois dernier. Mais
le côté de la production journalier ne clarifie pas les détails du plan.
D'après la déclaration de Renault, il est attendu que la production e
Russie de lien trois compagnies en atteignent 900,000 une année
pour 15 années. J'ai battu et 70% disent un voiture.

Je suis joli lorsque je l'ai mis sur le seau en jardinant

Je suis fait オルハサカサハチ



霧の湖の畔に聳える「紅亜の殿舎、悪魔の住む居城、紅魔館。名の通り紅の外観をもつ洋館は、吸血鬼^{ヴァンパイア}のスカーレット姉妹を主に頂く幻想郷の一勢力だ。

鎧戸の隙間から漏れる陽は今日も高い。当主のレミリア・スカーレットは、欠伸混じりにベッドへと向かおうとしていた。束の間の梅雨の晴れ間、夕食後に夜半の月を眺めてグラスを重ねていたところ、気付けば空はすっかりと白んでいたのである。重い足を引かずって執務室に赴き、積まれた書類を片付けた頃には時刻は正午に近かった。

高貴なる夜の種族の威厳もどこへやら、睡魔に負けて落ちてくる顔を擦りながら、足取りも定まらずふらふらと左右に揺れる。鏡でも見せたくないような有様だが、生憎と吸血鬼は鏡には映らない。

口元に尖った牙を覗かせて、レミリアがふわあと大欠伸をしたところで――廊下の向こうより静かな声があった。

「まだお休みになられていなかったんですか、お嬢様」

「……咲夜か」

「夜魔の王、十七の支族に代表される不死者、流水、白木の杭、日光などに弱点を持ち大きなヘナルティを受けるが、魔力を始めとした能力にポーナスを持ち、月齢十三以上の夜においては通常の手段で死亡しない。」

古典的な従者服に身を包んだ紅い屋敷のメイド、十六夜咲夜^{スラヴァイ}。人間でありながらこの広大な屋敷を切り盛りする優秀な侍従^ニである。今は買い出しの帰りなのか、調味料や茶葉などをぎっしり詰めた紙袋を抱えていた。

普段、この完璧なメイドは主が執心してから雑事を片付けるのだが、今日は他に用事でもあったろうか。疑問に思ったレミリアは眠気の残る目元を擦り、咲夜が肩に担いでいる大荷物に目をやった。

「……で、咲夜。なんだそれは」

「むー!! 　　むーっ!!」

メイドの肩で『大荷物』が脚をばたつかせ、抗議の声を上げる。涙を滲ませ、叫ぶ声はしかし猿轡に阻まれ、声にはならなかった。全身をこれでもかとロープで雁字搦めに縛られているため、身動きも覚束ない。緑の髪から伸びる触角も、くてりと力を失っていた。

蛭妖怪リグル・ナイトバグ。レミリアも見覚えのある虫の妖怪である。無論、レミリアも誰かを問うた訳ではない。

「パチュリー様のご所望でしたので、お連れいたしました」

「パチエが？」

呆れた顔のレミリアに、咲夜は静かにこくりと頷いて見せる。成程、見ればリグルを縛り上げているのはただの縄ではなく、丁寧に呪文の編み込まれた呪縛縄^{マナ}だ。妖力も封じられ、無力な

職業／専門クラス。侍従、家臣を表す。考試、儀礼作法にポーナスを得るほか、文化レベル4以上の都市内においては限定的なスカウトとしても扱われる。

3 レベルメイジ呪文。魔法の縄で対象を拘束し無力化する。対象のサイズ修正・アーマークラスを無視するためレベル帯に関わらず有用。

少女のように暴れるくらいしか抵抗が出来ないのだろう。

「ご招待したとはお世辞にも言えない有様だが、それを気にする者はこの場にはいない。」

「あの本の虫が、自分から客人を招くなんて珍しいこともあるものね」

「はい、早急というご希望でしたので。……すぐにお休みの支度をいたします」

会釈して主の前を辞し、去ってゆく咲夜。哀れなリグルの呻きがそれに重なる。薄暗い館の奥へと引きずり込まれる蜚妖怪の末路を思い、レミリアはふむりと小さく息を漏らした。



「ぶはっ!? つ、なによ、何なの一体っ!!」

猿轡を外されたリグルは、噛みつかんばかりの形相で精一杯の抗議を叫ぶ。弱小妖怪であることは否定しないが、それでも一寸の虫にだって五分の魂。やられたまま泣き寝入りなんてできやしない。

「貴女に用事があるだけよ」

というのに、この地下図書館の主である魔法使いは動じた様子もない。揺り椅子を軋ませながら、リグルの憎しみを込めた視線を分厚い面の皮で受け流す。

知識と日陰の魔女、パチュリー・ノーレッジ。第六階梯の魔道師^{マジック・マスター}にしてその姓に知識を頂く紅魔館の顧問魔術師である。彼女は同

時にこの紅魔地下大図書館を任された書監^{ブック・ワーム}でもあった。

「そんなのどうでもいいから、これ解いてよ!!」

床の上にじたばたともがくりグルの叫び声が、高い天井の下に反響する。

紅魔館の内部は咲夜の手によって空間を調整^五され、迷宮しみた広さをもつことが知られているが、その地下にあるこの図書館はそれに輪をかけて広大であった。天上までの高さは優に数百メートルを超え、左右に聳える断崖は全て、ぎっしりと書籍を納めた本棚が積み重ねられたものだ。

前を見ても後ろを見ても、書架の峡谷。山脈と化した叡智の集積には果てが見えない。禁断の叡智を無尽蔵に蓄える書の魔界^{ワール魔法図書館}に接続するこの地下大図書館こそが、パチュリー・ノーレッジの封土^{ドメイン}である。

リグルが転がされているのはそんな本の大峡谷の狭間にある書卓であった。積み上げられた魔道書には付箋が挟まれ、書台には何枚もの羊皮紙が留められている。少し離れた場所では、赤髪の司書^{セブ}がおろおろしながら事態を見守っていた。

「だいたい、頼みごとがあるんだつたら、こんな事しないでしょ普通!!」

「咲夜には貴女を連れてきてとしか言っていないからね。そんな

四 上級クラス。大法令(コデックス)に所属する魔道書の管理者。あらゆる系統・形式の魔法を書籍という手段で保管。共有し、詠唱に時間を要するようになる代わりに自在に行使できる。

五 秘義アイテム。アーケイン・ティック・トリックと同種の効果を持つ。

六 強度と同じだけの背景魔力放射をもち、特定の形式の魔法を強化し、それ以外の形式の魔法を弱める。魔法使いの工房は多く封土化した土地に築かれる。

七 パチュリーとの契約する使魔。元は異教の魔神に連なる外典(テポクリファ)である。

ことよりも」

リグルの抗弁を一方的に打ち切つて、パチュリーは揺り椅子から腰を上げた。ネグリジエめいたふんわりした衣装を引きずつて、縛られたまま床に転がる虫妖に歩み寄る。

知識の魔女の、限の浮いた目元から、険しい視線がリグルをねめつける。

「あなたが虫妖の長であるというのは知っているの。何を企んだのかは知らないけれど、釈明の機会は与えてあげるから、納得のいく説明をして頂戴」

「ふえ……？」

「それとも、あなたが見た目通り、**王の器**^八に足りてないからこうなっているのかしら。どちらにしても分かりやすく貴女に八つ当たりでもないかと腹の虫が収まらないのだけど」

剣呑なセリフと共に細い指がリグルの顎をなぞる。ぞくぞくと身を震わせて、リグルは震え声で叫んだ。

「な、何の話し?!」

「惚けるのね。いいわ、目の前の鬱陶しい虫を積極的に叩き潰す方法は……」

開いた本の頁に顔を埋めながら恐ろしいことを喋り出すパチュリーに、リグルは悲鳴を上げた。

「だ、だから! 何の事か分からないわよ!」

「……そう」

仏頂面になつて、パチュリーは短く呪文をつぶやくと、書卓に

^八 虫怪の中に生まれる女王存在。従属する種族との関係は基本的に「友好的」となり、その支配領域内で彼らの行動に恩恵を与える。

あった本を手元に引き寄せた。魔女の片手に余るほどの分厚い妖^{ハドカイ}革^{二〇}の一冊。禍々しい雰囲気から一目で封印指定の類だと分かる魔道書だ。付箋^二の挟まれた頁を開き、パチュリーはリグルの眼前に押し付ける。

「わ……」

ページを開いた瞬間、ばらばらと小さな紙屑が散れおちる。

本は無惨に喰い荒らされていた。重なる頁を繰り抜いたように無数の穴が開き、文章はそこら中で虫食いになつてすっかり判読不明だ。リグルには魔道書は読めないが、これが既に本としての用を成さない状態なのは理解できた。

「……ご覧の有様よ。これも、これも、どう見ても虫の仕業よね」

虫に食い荒らされた魔道書を次々と開いてはリグルに押し付け、パチュリーは静かな怒りをあらわにする。浮遊盤^{フロイティングディスク}の力場^三に魔道書が積み上がり、みるみるうちに小山となつた。しばらく前に里でも字喰い虫の被害があつたと言うが、それとは桁が違っている。「被害は蔵書の二割近いの。ここまで大規模な字喰い虫の被害は今まで無かつたわ^三。惚けても無駄よ。仮にも虫の王である貴女が知らないはずがない」

^九 レベルメイジ呪文。アポルト。術者の所有している片手で持てる道具ひとつを手元呼び寄せる。

^{一〇} 書籍を保護する魔界の獣や虫の表皮を用いた装。強度が飛躍的に向上するが濃度の浸食深度が増加する。

^{一一} ブックマーク・オフ・ステイシス。呪文や疑似呪文能力に割り込み、発動を一時的に中断する。

^{一二} 1レベルメイジ呪文。500kまでの荷物を運搬できる円盤状の力場を作成する。煙火の怪異は図書館に被害を与えなかつた。東方鈴奈庵第三話。妖怪退治の師走(後編)

「し、知らないよ！ そんな——」

「そう。じゃあもういいわ。八つ当たりで済ませるから」

「ひええ!？」

問答無用で精霊の力が喚起される。床を這うようにして逃げ出そうとしたリグルに、パチュリーが構わず魔法をぶつけようとしたところで——

「——ずいぶんと短慮じゃないか。それが魔法使いのやることかい、パチュエ」

割り込む声^四とともに、パチュリーの魔法が消失する。リグルが驚いて頭上を見上げれば、重なる書架の上に腰かけてくつくと喉を鳴らすレミリアの姿があった。

パチュリーは夜の主を視線だけで振り返り、

「覚えておきなさいレミイ、魔法使いは自分の領分を荒らされることを一番嫌うのよ」

「そんなだから百年生きてても碌に知り合いもできないのさ」

「そうね。嫌味な蝙蝠くらいしか見つからないわね」

パチュリーの皮肉を笑って受け流し、レミリアは書棚を蹴ってふわりと地面に降りる。

と、同時に吸血鬼は顔をしかめ、こぼ、と小さく喉を震わせた。

「何だ、この匂いは」

「ニコチノイドとアルカロイドの虫除けよ。これ以上余計な虫に増えられたらたまったものじゃないから。吸血鬼にも効く^五なんて知らなかったけど」

^四 スペルインターセプトと同様の吸血鬼の疑似呪文能力。常駐・割込で呪文の発動に對して負のレベルを与え、無効化する。

^五 香油、精油などの強い匂いは吸血鬼の五感を阻害する。

新たな発見とばかり、手元の書を開いては何事か書き加えてゆく。パチュリー。レミリアは呆れ混じりの吐息と共に図書館の卓上で煙を燦らせる香炉を一瞥し、リグルの傍に近付いた。

「パチュエの八つ当たりはどうでもいいとして、客人にこの扱いは頂けないね」

レミリアが紅い爪^七を振るうと、リグルを拘束していた呪力の縄はあっさりとは千切れる。生きた魔法とも言うべき吸血鬼の爪が、魔法を構成する精髓を吸いきったのだ。

「あ、ありがとう……」

驚いた様子のリグル。パチュリーも似たような表情を浮かべていた。まさか傲慢を体現するような吸血鬼が虫妖などに情を見せるとは思わなかったらしい。

「そんな虫虻に肩入れするの？」

「立場はどうあれ、彼女は一族の長、妖の王だろう。無碍にするのは夜を統べる者としての沽券に関わるんだよ」

「……そうね。その子は永夜異変で唯一、貴女に土をつけた相手ですものね」

「うるさいな」

レミリアは不機嫌に牙を見せて唸る。永い夜の異変の折、犯人探しに乗り出した紅魔館の主は、リグルとの遭遇で彼女の蹴りをまともに食らって戦線離脱するという苦い経験をしていた。

狙ったものではなく、たまたま振り上げた踵がレミリアの顎を打ち抜いただけのことであつたが——偶然とはいえあまりにも見

^六 クリーチャーの種類、弱点を知るには該当する知識技能の判定が必要。詳細な記録は判定にボーナスを得る。

^七 これも吸血鬼のスペルインターセプト能力。こちらは能動的に使用している。

事に決まった一撃にしばらく身動きも取れず、レミリアは同行していた咲夜がリグルを退治するまで弾幕勝負に復帰できなかったのである。この一件はしばらくの間、1面BOSSのジャイアントキリングとして天狗の新聞の一面を賑わした。

幼き紅き月は、昔の醜聞を振り払うように咳払いをする。

「それにしても、だ。うちの魔女どのは普段からここの防備についてご自慢だったじゃないか。その割には、虫程度に食い荒らされてるなんてのは頂けないね」

「見くびらないで。本への防護魔法はきちんと稼働しているわ」「ほう？　じゃあどうしてこんな有様になってるんだ。パチエの魔法が役立たずだったってことかい」

忠実なメイドが持ち込んだティーカップ^ハを傾けながらレミリア。背中の羽根が愉快そうにぱたぱたと揺れていた。

「そうね。保護魔法は本を高熱や湿気、経年劣化から護るものだけれど、それでも本が本であるという本質は変わらないわ。つまり、書籍自体を直接害する概念なんかには効果が薄い可能性があるの。勿論、普通の虫なんか寄せ付けもしないけれど」

「妖怪になった虫なら有り得ない話じゃないということか」

紅魔館の地下大図書館は、その内部で叡智の外方次元界^九、ヴワル魔法図書館という異界と接続している。

かの地は剣呑な魔神や知識の封じられた禁書^{ベイン}の巣窟であり、その影響を受けた虫が妖怪化し、図書館に被害をもたらした可能

ハ 咲夜の時間停止操作による。

九 メタフレーン。現実を重ねて存在する異世界。より概念を主体にしている。

○ 魔法災害を引き起こす危険な魔道書。大古典によって閲覧、所蔵を禁止される。邪悪な意志を持つものも少なくない。

性は捨てきれないとパチュリーは語った。

「まあ、理屈は通ってるな」

「待つてよ！　私が知らないってのは本当なんだから！　わざわざこんな危ない所に入りこむような真似、知ってたら絶対に止めるもの。わざわざ退治されたが子達なんかいないわよ！」

拳を握り、大きく手を振って力説するリグル。

「では、誰がこれをしたと言うのかしら」

「う……その、それは、……私が知らない虫だとしたら、外来種かもしれない、けど」

外来、つまり幻想郷の外から紛れこんできた虫だということだ。通常、幻想郷に流れ着くのは外の世界では失われ、幻想となった者達である。しかし、新天地を求めて意図的に結界を乗り越えんとする来寇者^三も、少数ながら存在している。

わざわざ危険を犯してまで結界越えを試みることから分かるように、彼等はバイタリテイに溢れ、少々の苦難などものともしないタフな連中である。先住する者達を駆逐し、自分たちが支配者とならんと企むことは常であった。大人しく共存など選ぶことはなく、基本的に彼等は幻想郷とは対立することになる。

「さつき話に出たけど、ここには虫は近付きたがらないの。嘘じゃないよ。食べるものもあまりないし、虫除けも強いから。

……その、だから、外来種が紛れ込んで、気付かないってことはありうるかも」

「結局、貴女の監督不行き届きじゃないの」

「ひええ……その、そうなんだけど」

三 マリジナント。妖怪の山に信仰領域を拡大する守矢の神々が代表的。

リグルは蟲の王としての統制力を備えているが、全ての虫の上位に問答無用で君臨しているわけではない。どちらかと言えば信頼関係で成り立っている支配である。

「なあ、パチエ。ところで――」

「待って！」

リグルの鋭い声がレミリアの言葉を遮る。かすかな反響を残し、図書館が静寂を取り戻す中、真剣な面持ちで、リグルは額から伸びる触覚を小刻みに動かしていた。

――かち、かち、かち。

虫の王の五感が、まるで時計の秒針のような硬質な音の気配を探り当てて。レミリアとパチュリーは顔を見合わせると同時、突如書の峡谷が軋むようにざわめいた。

書架のはざまに警報^三が鳴り響く。本棚にぎつしりと詰め込まれた魔道書達が、捕食者を前に悲鳴を上げたかのようにだった。

「……どこー！」

「わからないよ！ 声が聞き取り辛くて……！」

張り詰めた緊張が増すなか、規則正しく響く針の音は、徐々に大きさを増してゆく。

かち、かち、かち、かち。

連続する硬質な音が、わずかの間をおいて停止する。

積み上げられた書籍を蹴散らし、巨軀が飛び込んできたのはその瞬間だった。

三 効率化された0レベルメイジ呪文、設定された暗号鍵（パスワード）なしに入ってきた種以上のクリーチャーに対する警報を発生する。この段階までシバンムシのサイスは極小であり、呪文の対象外。

三 従属を拒む者とは感覚共有のパスが形成されない。

即座に反応したのはパチュリーだった。地下大図書館の主たる権杖^二をもって手元に愛用の魔道書を引き寄せ、圧縮言語で呪文の詠唱を省略^三。

――土&金符「エメラルドメガリス」

地より立ち上がった翡翠の直方板が、パチュリーとリグルを取り巻くように立ち上がる。碧の防壁は出現した巨軀を押しとどめ、がりがりと激しい火花を散らした。

翡翠の輝きに照らし出されるのは、虎縞の羽根をもつ不気味な甲虫だった。身の丈は少女たちよりも大きく^二、その全身は禍々しい魔素の鎧^三に覆われている。

かち、かち、かち。虫が巨軀に似合わぬ硬質な音を響かせるたび、あたりの書籍が独りでに侵され、自動的に朽ちてゆく。

「こいつら――!?」

「姿を見せたわね、紙魚^{ブックワーム}」

リグルが叫ぶ中、パチュリーは構わず反撃に転じていた。七曜を自在に操る魔女の舌先が猛烈な速度^二で呪詛を編み上げ、獣と歌の魔素を引き寄せてゆく。

二 不意打ちを防ぎ先手を取る。魔法使いの権能

二五 魔道書からの呪文詠唱は全ラウンドアクションだが、高速詠唱^一、呪文最適化、魔法学の達人の特技を重ねて初手番の標準アクションまで短縮している。パチュリーはさらにこの呪文を魔道師の権能によって呪文スロットへの常態化し、割込み行動としてアクションを使用せずに行使している。

二六 目天化（エンラーション）の疑似呪文能力。

二七 呪文抵抗・無効化能力及魔法の鎧（メイジ・アーマー）の疑似呪文能力。

二八 高速詠唱^一、呪文最適化による標準アクションでの行使。

素早く懐のポーチー^二に指を滑り込ませたパチュリー^一の爪先が床を叩くと同時、瞬間練成された剣が十七本、虚空へと跳ね上がった。詠唱により鍛造^{きやうぞう}された刃の群れが、魔法使いの頭上でくるくると回転しながらその切っ先を甲虫へと定める。風圧に舞い散る紙片を斬り裂き、音も無く打ち出される剣が、軌跡だけを残して虫の巨躯に突き刺さる。

が、魔を挟り殺す白銀の切っ先もまた、虫の分厚い表皮を貫くことはできず、その表面で弾かれるにとどまった。立て続けに射出される剣をもっともせず、妖虫は素早く身を翻し、書架の断崖を食い破って峡谷の奥へと消えてゆく。

弱った書架が軋みを上げる。本棚の断崖が自重に耐えかねて崩壊し、書籍の雪崩が引き起こされたのだ。本棚といつてもその標高は数百メートルを超える。地も砕けんばかりの轟音が図書館を揺るがし、書籍が一面床を覆う。

「成程、こいつは結構な化け物じゃないか」

頭上から響くレミリアの声。吸血鬼は倒れた書架の下から蝙蝠になって脱出し、天井のシャンデリア付近に再生^三していた。重力を嘲笑うように上下逆さまに天井に腰をおろし、持ち手だけになった紅茶のカップを見つめて吐息する。

「レベ^{レベ}ルを上げて物理で殴れか。魔法使いにしては少し優雅さに欠けるんじゃないか？」

「ガンダルフも、危難において最も頼りとしたのは愛用の剣よ」

元 構成要素ポーチー。メイジ呪文の行使には接触 五感 視認などの構成要素が必要なものがある。それらを一式収めた携行品。

瞬間練成金は構成要素に鉛と錫への接触を必要とする。

三 吸血鬼は弱点による攻撃の他、銀あるいは魔力を帯びた武器でなければダメージを受けず、破壊されない。

答えて、パチュリーも宙空へと移動する。隣にはリグルを抱えた赤髪の司書。惨憺たる有様となった図書館に、朽ちた魔道書を一瞥して舌打ちし、パチュリーは吐息。

「話を聞いてよ！ 大人しくして！」

焦りを滲ませてリグルが叫ぶ。彼女もまた自分の職分を果たすべく、思念を飛ばして説得を試みていたのだ。しかしその成果は捗々しくない。

かち、かち、かち。

埃の舞い上がる広大な図書館に、規則正しい硬質な音が響く。結末までのカウントダウンを刻むかのごとき、さながら死神の時計針の音だ。

その音は一つだけではなかった。書架を食い荒らす用に取り付いた虎縞は、見えているだけで百以上。彼等の奏でる針の音は、わずかのずれもなく同一のリズムを刻む。

虫が一匹で行動するはずなどなかったのだ。個にして群、群にして個。世界最多の生命体は、彼等^{レミリア}の蟲なのである。

「手を貸そうか、パチエ」

「結構よ。魔法使いになった時から、悪魔に魂は売らないと決めているの」

レミリアの返事と並行して、魔法使いの舌は同時に呪文を編み上げていた^三。古史の言語に精通し、呪文を発動媒体とするパチュリーは、ひとつの口で同時に複数の呪文を詠唱するという神技を可能とする。

書架を掘り抜き、死角から飛び出してきた虎縞の虫に振り向き

三 多重詠唱。アーケメイジの上位特技。標準アクションで2つの魔法を行使する。

ざま、伸ばした親指、人差し指、中指を突き付ける。

木符「フラッシュオブスプリング」

四季と五行の相乗で喚起されるのは風霊の疾駆。視認すら不可能な速度で弾かれた圧縮空気が、蟲の表皮に炸裂した。弾け飛ぶ衝撃波が空間を軋ませ、書架をびりびりと震わせる。

膨大な魔法の組み合わせの中から木行を選んだのは、図書館への二次被害を防ぐ観点からだろう。もし防護魔法自体が無効化されているとするなら、炎や水は本を傷つけるからだ。

しかし衝撃波の中でまとも平然と姿を見せる虎縞の羽根に、パチュリーは呻くように咳を漏らす。埃の舞い上がる図書館、喘息持ちの魔女にはお世辞にも良い環境とは言えない。

「……頑丈な紙魚ね」

「違う、紙魚がこんなに頑丈なはずないよ！」

牽制に魔法の矢^{マジック・アロー}を放ちながら、吸引器を口にするパチュリーの横で、触角を立てたりグルグルが叫んだ。

「こいつらは、別の字食い虫なんだ！」

「別の、ね。……小悪魔」

主の命令に即応して、控えていた赤毛の司書が一冊の本を手を手に宙を奔る。魔法大百科事典^{マジック・エンサイクロペディア}の紙面に顔を埋めるようにして、パチュリーは目の前の妖虫の正体を探り当てた。虎縞の背中、特徴的な鳴き声、書籍にトンネルを掘るように食い荒らす食害痕跡、

「1レベルメイジ呪文。決して標的を外さない魔法の矢を放つ。矢の本数は術者のレベルに応じて増減する。」
「秘義アイテム。知識判定に大きなボーナスを得る。」

分厚い背中の羽根。——それらの全てが合一する虫はひとつ。

「シバンムシ……死^{death}番虫^{grave beetle}、ね。奮った名前じゃないか」

レミリアが面白そうに声を上げた。規則正しい鳴き声は、死神が生者の寿命を測る時計の音になぞらえて恐れられた。書籍への食害としては紙魚が最も有名だが、実際の書籍への被害の八割以上はこのシバンムシによるものであるという。

「そうね、紙魚^{ワーム}なら、食害は書籍の表面をなぞるようになる筈。頁自体を大きく損なうことはない。それゆえの『字食い虫』。書籍に穴を空けて食い荒らすのは別物ということだね」

「でも、どうしてこんな——」

蟲の王の呼びかけを一顧だにせず、甲虫はかちかちと鳴きながら背の羽根を広げる。

日&月符「ロイヤルダイヤモンドリング」

宙を滑るように身をかわし^{スワップ}、スペルを即座に詠唱^{キャスト}。直系二十メートルにも迫る巨大な日環が展開、蟲の突進を押しとどめた。光輪の鎧は激しい回転で甲虫のあぎとを食い止め、威力を上げながらじりじりと虫たちの包囲を後方に押しやつていく。

ここに蟲の王がいると言うのに、まったくのお構いなしだ。元々外からやつてきた外来の種、むしろ当代の王を弑して王位の篡奪くらいは考えているかもしれない。

「ひええ……」

「魔法使いの権能。5フィート・シフト。次元末たきの効果を備え、機会攻撃を受けるときにエンゲージを離脱する。」
「三。敵対的なクワイチャーの影響下における防衛的発動には成功している。」

ぎちぎちと目の前に迫る巨大な同族のあぎとに怯えながらも、リグルは必死に抵抗する。触角を立て、あらゆるチャネルから従属を呼び掛ける思念を飛ばしているが、まったく影響が見られない。

ここに果食った虫達は、図書館の魔道書を食い荒らし、魔法的な防御まで身につけているらしかった。一旦はロイヤルダイヤモンドリングの威力にたじろいだものの、虎縞の背中を軋ませながら、再びパチュリーとリグルににじり寄ってくる。

書籍を食い荒らす魔虫は、呪文を媒介に行使するパチュリーの魔法そのものすらも喰いはじめたのである。身の危険を感じてリグルは眷族の召喚を試みるが、この状況では応じる声はない。

そんな中、当の主であるパチュリーは落ち着いたものだ。赤髪の司書元を呼び寄せて何十冊という本を積み上げさせ、腰をおろしてそれらを読み始める。

「……目の前の面倒な連中を根こそぎ駆除する方法は……」

この期に及んで退治法を探し始めるパチュリーに、リグルは気がではない。

「ちよつと、何を悠長なこと——」

言いかけた瞬間、パチュリーの周囲に無数の魔術書が浮かび上がり、自動詠唱によってひとりでにページを捲り始める。全方位に増大された識者の手により魔道書を読み耽りながら、パチュリーは静かに立ち上がった。彼女の周囲に五つの石

モ 種族の権能。サモン・スウォームと同等の疑似呪文能力。

元 小悪魔は特例を除いて書籍の管理・防衛に関する行動以外を行えない制約がかけられている。

元 1レベルメイジ呪文。本冊の中身を3時間かけて熟読したのと同じ効果を得る。発動には主ファントアクションが必要。

が浮かび上がる。宝石のように輝くそれらは、硫黄と水銀よりエリキシルを、エリキシルより黄金を錬成し、アルス・マグナに至るパチュリー・ノーレッジの叡智の証、賢者の石。

莫大な効果をもつ魔法の増幅装置をその身に纏い、膨大な書の海に身を沈め、蓄積された知識から、もつとも相応しい魔法を新たに組み上げる。

それこそが動かない大図書館、パチュリー・ノーレッジの魔法。まさに絶技。芸術的なまでに美しい詠唱は、音節にして七万と六千八十五の呪文をわずか六秒半で終わらせた。

「この図書館は私のものよ。金輪際、お前たちなんかに触らせない」

——金土符「ジンジャガスト」

一方的な宣言と共にパチュリーの喚起した魔法は、スペルの形こそ取っているが、その本質はまったく別のものだった。豪風となつて吹き抜けるのは、臭化メチル、リン化アルミニウムを主成分とし、濃密なアルカロイド化合物を含む、猛烈な毒の蒸気風だ。高熱と毒素で虫妖の霊的受容体に作用し選択的に殺戮する死の燻蒸である。

毒妖霊の息吹は図書館を吹き荒れた。毒霧の風に飲み込まれ、書架に取り付いていたシバンムシの群れは次々に泡を吹き、仰向けになつて絶命。見る間に塵になつて朽ちてゆく。死の番人たる

四。魔法の効果範囲と効力を増幅・拡大する錬金カテゴリーのレアアイテム。パチュリーはこれを5つ重複使用している。

虫をも一方的に駆逐する、暴虐なまでのスペル。

「ひあ……ッ」

押し寄せる毒霧にリグルが顔を覆いかけた瞬間。彼女の姿は柔らかな水泡の中に取り込まれていた。

「あ、あれ？」

水符「プリンセスウンディネ」。優しい水の防壁の中に取り込まれ、驚くりグルの傍には、同じく水泡に囲まれたパチュリーの姿もある。

宙にふわふわと浮かぶ泡の中、毒が自分を襲うことは無いのだと気づいて安堵の息を漏らすリグル。

十五分の作用の後、ジンジャガストの毒霧は綺麗に分解し、構成要素である酸素と水に分解されて消滅する。

「これで、お終いね」

破片すら残さずに朽ちたシバンムシ達を一顧だにせぬまま、パチュリーはこぼつ、と小さな咳をして静かに告げた。



「……大変だったのね」

「本当よ。台無しになった本の修復だけでどれだけかかるのか」時を経て、再び地下大図書館。

しぶとく生き残ったシバンムシの残党はリグルの説得に応じて投降し、図書館は復旧作業のただ中にある。赤髪の司書の指示に

妖精メイド^四やホフゴプリン^四が奔走し、今日も時ならぬ騒がしさだ。

槌の音響く書卓には主の魔法使いに向かい合うように、森の人影遣い^四アリス・マーガトロイドの姿があった。同じ魔法使い同士、二人はこの図書館で交流をもつ事が度々あった。時には白黒の魔法使いや悪魔の妹が混ざることもあるが、今日は二人とも姿が見えない。

代わりに地下から響いてくる小さな地響きが、その答えた。

「なあ、ところでパチェ」

「何よ」

書卓にはもう一人、別の姿もある。テーブルの端を占領し、夜のプリンを口に運びながら満悦のレミリアだ。夜の王の威厳などどこ吹く風と、甘味に満足げな彼女は、スプーン片手に面白そうに卓上に顔を乗せる。

「あの虫、やけにパチェにご執心のようだったが、その理由はわかったのか？」

レミリアの問いに、パチュリーは途端に不機嫌になって本に顔を伏せた。

「？ どうした、パチェ」

「うるさい」

首を捻るレミリアに、アリスが仕方ないわよね、と口を挟んだ。「シバンムシの食害は、魔界でも問題にされているわ。最近研

^四 紅魔館に仕える妖精 役に立たない。

^四 紅魔館に仕える妖精 有能

^四 ヘルメス学派の魔法使い。ゴーレムの作成、使役に長け、従魔数に上限を持たないほか、残り助力数を無視して従魔体に命を与え、使役できる。

究も進んでいてね」

「……アリス」

本の向こうから不機嫌な視線を飛ばすパチュリー。それ以上余計なことを言うなど咎めるような彼女の視線に、しかしアリスはくすくすと微笑んで、

「文字ではなくて、本そのものを侵す性質は魔法使いの悩みなの。対策はいろいろ進められているわ。防除剤として植物性の香油なんかが有効なんだけど――」

紫蘇、花薄荷、支那肉桂など、多くの植物由来の香油は忌避剤としてシバンムシを遠ざける事が知られていると、アリスは語る。

ただね、と指を一本立て、

「植物由来の成分の中で、到手香の香油だけは、選択的にシバンムシを誘引するって研究があるのよ」

「……成程ね、本の虫同士、気が合うってことか」

傑作だとばかり、腹を抱えてけらけらと笑うレミリアに、パチュリーは憮然としたまま開いた本の頁に顔を押しつけた。

()

【奥付】

「レフェラル・エフェメラ・ブックワーム」

平成26年6月29日

七曜魔女の舞踏会4

オルハザカサンパンチ

発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅 おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。

